地域福祉文学大賞

特別賞（西区社協賞）

判官舟かくし

トン敦

令和５年度に全国公募した「地域福祉文学大賞」の受賞作品です。
作品の著作権は、社会福祉法人新潟市社会福祉協議会にあります。

新潟市西区社会福祉協議会

「これは昔の話じゃ。わしの家に代々伝わっているものだが、みだりに他の人へ言ってはいけんぞ。」
　古老のこの重々しい口調にその周りの子どもたちは怖いもの見たさで集まってきた。もちろんこの古老に背を向けて小さな手で耳を覆ってしまった子どももいた。古老の話を聞いてしまったのならばその時にはその話を背負って行かなければならないのではないかという恐怖感もあったのかもしれない。
「ここからすこし海の方へ行くと角田岬というのがあるだろう。白い灯台が海に映える風光明媚な場所じゃ。険しい岩壁に沿って不安定な階段が上まで続いていく。そして上りきった時には視界のすべてが日本海となる、そんな場所じゃ。わしはもう上れんがな。つまりは上がきれいってことなんだが、ここからが本題じゃ。来たもの来たもの皆、上を目指してあの階段を上がっていくが、下じゃ。その岬の下には海に削れた洞穴がある。いわゆる判官舟かくしじゃ。」
　古老は目を全く動かさず口元だけに笑みを浮かべた。そして静かに吐き出していた息を一気に取り返すかのように大きく吸い、またゆっくりと吐きながら子どもたちを見つめた。子どもたちも既に引き下がれないような、そのような束縛感が一体に漂っていた。
「いいか？判官舟かくしっていうのはかの源義経が平泉に逃げる際に身を隠した場所といわれているんだが……」

「義経様、どこか岸に船を止めなければ我等海に飲み込まれてしまいます！」
　文治３年３月のある日。兄である源頼朝の追手から逃げていた源義経一行は日本海を北上していた。空には重く厚い暗雲が立ち込め、海上へと湿った風を送り続けていた。その風に海の波はいとも簡単に煽られ、もはや彼らの命は海に握られているも同然であった。
「そんなことわかっておる。しかし我等は進まなければいかんのだ。ここでこの強風の前に命を落とすことを恐れるならば、我らが目指す場所まで命あるはずはない！」
　激しく揺れる船内でこう言い放った義経であるが、すぐに降り出した大雨にはさすがに参ってしまった。視界は一寸先も見えない。風によってどこまでも細かくなった雨粒と舞い上がる潮は彼らの視界を全く奪ってしまっていた。追手ももし同じルートをたどっていたら。

ここでの選択が義経にとって状況を好転させるかもしれない。彼は叫んだ。
「進め！これは我等にとってまたとない好機である！弱音なぞ吐いてられんぞ！」
家来たちもこの気迫に圧倒されて、掛け声をあげながら荒波を進んだのも束の間、船底に鈍い音がして船は動きを止めてしまった。彼らは座礁したのである。
家来たちが船から降り状況を確認したが、すぐに船を流れへ戻すのは難しそうであった。というのも、下を見てみると黒く突起の多い岩礁が見事に船に引っかかってしまっていたのである。義経も船から降り、船底の様子を確認したが、すぐの出発は絶望的であった。唖然と船を見つめる彼ら。そこへ容赦なく船を座礁させた犯人である風と波が襲い掛かり、激しい雨は彼らの体温を徐々に、徐々に奪っていった。
「義経様、いかがされますか。」
家来の不安そうなか細い声はもはやこの場所では幾多の自然現象にかき消されんとしている。
「ここがどこかもわからない。船もダメになった。追手の状況はわからないが、かなり追い詰められた状況に我々は置かれているのかもしれない。雨で霞んでよく見えないがどうやらここは岬のようだ。どこか洞穴でもあるかもしれない。そこに隠れながらこれからの事を考えよう。お前らもしっかり休むとよい。」
彼等は膝のあたりまで、風にかき混ぜられた海水に浸かりながら重い足取りで洞穴を探し、すぐ近くに大きさも十分なものを見つけることができた。しかしここでのこのこ休んではいられない。今もどこかで義経は狙われている。また体力の消耗もひどい。何よりこの雨、風、海の様子は彼らが今まで見たこともないような荒れようであった。
「これは天変地異か。災いなのか。我々はいったいどうしたらいいんだ。」
義経が弱音を漏らした時、どこからか男の声がした。
「だ～いじょ～ぶで～すか～ぁ。ど～なた～かいらっしゃいますか～。」
この声は確実に彼らに近づいている。もしかしたら追手かもしれない。家来は義経を囲み、服は濡れて重くなり、疲労し切っているにも関わらず、刀を抜いて声の主を待った。ゆっくり。ゆっくり。近づいてくる。そしてその時が来た。

「あぁ、こんなところにも人がいた！大丈夫ですか？」
　その声の主は中年の男性であった。
「おのれ、何やつ！」家来はキッと彼を睨み、様子をうかがった。
　その中年の男は目の前に急に刀が現れてきたことに驚いたようで腰を抜かしてしまった。
「私は、べ、別に悪いことなんかしようとしてないですよ！や、やめてください…刀なんか…。怖いですから。」
「ならば貴様は何者か名乗れ！」
　ひどくおどおどとしていたため、彼らは刀をしまって聞き出そうとした。
「わ、私は災害ボランティアの者です…。皆さん、あれですか…？この前の豪雨でここへ避難された方ですか？それならばここは危険ですから。とりあえず別の場所に行きましょう。」
「何を言っている。ぼらんてぃあなんていう語は聞いたこと無いぞ。貴様、異国の者か。」
「異国といいますか…。あっ、でもここら辺のもんじゃあないですよ。一昨日災害ボランティアセンターで受付してここでボランティアさせてもらってますんで。なんていうんでしょうかね。まぁ災害ボランティアなんですわ…。」
「えぇい！全く理解できんではないか！義経様こやつをいかがされますか！？」
　彼等にかくまわれていた義経は顔を出し、男を見つめた。
「何を言っているかわからんが、嘘もついているようではない。一つここは賭けだ。信用してみよう。ならば、そのぼらんてぃあが何やら知らんが、とりあえず安全な場所へ連れて行っておくれ。」
「はい…わかりました。とりあえず、ここから進んだところに避難所がありますから。…足元気を付けて。…」

　義経一行は岬の洞穴から避難所へと避難した。避難所は彼らにとっては見たことの無い素材でできた大きな屋根と頑丈な壁に覆われ、近隣の住民らしき人々が避難していた。彼らは受付で毛布をもらい、固まって暖を取ろうとした。装束も早く乾かしたいところであった。
「義経様、ここならさっきの洞穴よりは安心ですね。雨風も防げるし、こんな分厚い布までもらえましたよ。さすが、あの男を信じて正解でしたね。」

義経も薄く笑みを浮かべ、静かにうなずいた。気づけば頼朝の追手から逃げ始めてからというもの、どこかで休むことなどなかったが、今この避難所とやらで自分を信じてついてきてくれた家来たちと毛布にくるまりながら、雨風をしのげるのは久しぶりに感じる安堵ではないか。気づけば全員眠りに落ちてしまっていた。

しかし、やはりこの中で最初に目が覚めたのは一番警戒心の強い男、義経である。家来が寝息を立てている中、彼は毛布にくるまりながら左右を見回した。そして自分をここへ連れてきてくれたあの男を見るや否や、手招きして呼んだ。

「忙しい中申し訳ない。しかし感謝を言わせてほしい。ここへ連れてきてもらって助かった。今頃さっきの場所にいたら私の命は既になかったかもしれない。ここで気になることがあるんだが、あの洞穴で助けてもらったとき、なんか言っていたな。ぼらんてぃあなんちゃらとか。それについて教えてほしいんだ。私を助けてくれた仕組みについて。」

「ボランティアセンターの事ですかね…？雨もあがりましたし、少し見に行ってみますか？」

男は義経の手を取り、ゆっくりとボランティアセンターへ案内した。

「よろしいですか？ここが災害ボランティアセンターです。この地域は一週間前の豪雨によって甚大な被害を受けましたのでここの災害ボランティアセンターを設置して、ここを拠点として作業に当たっているわけです。そしてこの場所が受付です。ボランティアの人はここで受付をします。この受付をしたのちにですね、注意事項を聞いたり、地域や状況の把握、資材の貸し出し作業などがありますが、ここは拠点として情報収集を行ったりします。」

義経はほうほうとうなずきながら、ボランティアセンター内で活動している人の動きをしきりに追いかけていた。

「ここは拠点というわけか。その…ぼらんてぃあっていうのはどのような意味なのだ。」

「ボランティアはここでは復興のお手伝いをしたり、被災された方のサポートをする、といったような感じですかね…。」

「それがわしを助けてくれた君ということになるのだな。」

男はそうですと迷いのない返事を義経にして見せた。義経はいたく感心したように鼻息を急に荒くしながら話し始めた。
「つまり、天変地異だな。地震とかこういう雨だとか、民衆の家がなくなったり壊されたり、そうでなくても困っている人たちがいる。そうしてそんな人たちを助けたい者もいる。情報も錯綜するし、このような非常事態には円滑で効率的な作業が求められる。ここでこの災害ボランティアセンターが拠点となり、指揮を執るわけだ。だな？いや、これには感服だ。」
義経は口をあんぐりと開けたまま室内をずっと見まわしていた。
その後センター内の人と会話を交わし、避難所にいる家来たちのもとへ帰った。彼らは毛布にくるまりながら、帰ってきた義経を見て、義経様！どこに行っていらしたのですか！と叫んだ。そして義経は余すところなく彼が先ほどまで見てきた災害ボランティアセンターの仕組みについて家来に説明した。家来たちは義経の話を黙って聞き、中には涙を浮かべるものまでいた。
「…もし自分が住んでる場所に地震とかあったらどうしようって思いますもんね…。そんな時に拠点となる場所でこうやって…」
家来は涙をぬぐいながら災害ボランティアセンターの仕組みを何度も反芻していた。
義経を含め家来たちは皆で誓い合った。もし、我々が追手から逃れることができてどこかの国へたどり着いたら、真っ先に導入するのはこの災害ボランティアセンターだ。災いの時こそこうやって対処する必要があるんだ。自分たちがこうやってここにいれるのも円滑なシステムのおかげなのだと。
先ほどから雨は晴れている。周りのボランティアによると義経が岬についたとき辺りに、一週間前の豪雨以来の強い雨が降ったものだから、驚いたという。義経が嵐に飲み込まれて岬に着いたのは運命であろうか。義経一行はそれから一週間、船を直している間、災害ボランティアとして活動した。最初はもちろん一人ずつ受付に並んで登録を……。

「ふふふ…どうじゃ、わかったか…。この話がわしの家に代々伝わる話じゃ。むやみやたらに言いふらしたらいかんぞ。いいな。」